

ロシアに対する米英の決して終わらない戦争の深層歴史

【訳者注】これは、我々の普通知らない（教えてもらえない）深層の歴史を教えてくれる、手短で、貴重な論文である。タイトルの“deep history”の deep は、“deep state”（深層国家）の deep であることを知れば、ここで「米英の支配者」などと、特定できない超越的存在のように言っている理由がわかるだろう。（「彼ら」はある意味で確かに超越的存在だ。）我々のサイトの底流にあるテーマも、常にこの深層的存在である。ここで、ナチス・ドイツ（第3帝国）とアメリカの関係が collusion（犯罪的癒着）であるとして、この語が何度も繰り返されるのは、すばらしい言葉の選択だと思う。確かにそれは、接合でも合体でも利用でもないであろう。ここに、思いついた関連論文をいくつかリンクしておくことにする——「ブッシュ家のナチス・ドイツとのつながり」

<http://www.dcsociety.org/2012/info2012/160309.pdf>

「アメリカのファシズム小史」 <http://www.dcsociety.org/2012/info2012/161023.pdf>

「純粹悪的“深層国家”は片がつけられるか？（前編）」

<http://www.dcsociety.org/2012/info2012/170307.pdf>

アメリカとロシア（ソ連）の関係についても、我々は間違っただけであることを教えられていた。映画「史上最大の作戦」などによって、ヒトラーのドイツを倒したのは、アメリカと信じていたがそうでなく、（膨大な犠牲を払った）当時のソ連であり、アメリカは最後に、狡猾にも戦後の作戦上、少しだけ手を出したのであった。アメリカは現在、ナチスの果たせなかった夢を果たすために、その遺志を継いで存在する。

Finian Cunningham

May 4, 2017, Information Clearing House



何十年もの遅れの後、国連はついに、ナチのホロコーストを調査している、第二次大戦中の戦争犯罪調査委員会の手にあった文書を、公開した。ナチスの戦争犯罪についてのこれらの文書の出所は、西側諸国政府で、ベルギー、ポーランド、チェコスロバキアなど、戦争当時の亡命政府も含まれる。その期間は 1943 年から 1949 年までのものだ。ワシントンとロンドンは、長い間、その公

開をやめさせようと努力してきた。なぜか？

注目すべきことは、先月のこの画期的なファイルの公表が、西洋ではほとんど新聞記事にならなかったことである。驚くべきことだが、その理由はおそらく、この記録文書から拾い出すことのできる物語は、第二次大戦の隠された歴史、すなわち、米英政府と、ナチスの第3帝国の間の、**組織的な癒着**であるからだと思われる。

ドイチェ・ウェレ紙のある記事が、この公開された文書について言っている通り、「これらのファイルは、西側連合軍が、ナチスの強制収容所について、戦争の終る前に持っていた知識が、これまで一般に考えられていたより、遥かに多かったことを明らかにしている。」

<http://www.dw.com/en/un-holocaust-files-reveal-allies-knowledge/a-38498671?maca=en-newsletter-en-Newsline-2356-html-newsletter>

この記事が指摘しているのは、単なる「ナチス時代の犯罪」についての、西側同盟国間の「知識」だけではない。それが指摘しているのは、もっと露骨な国家癒着である。それはまた、なぜワシントンとロンドンが、国連の戦争犯罪ファイルを、一般に公開することを嫌がったかを、説明している。

これまで長く、西側諸国の間に盛んな論争があった——なぜ、特にアメリカやイギリスが、ナチスの死のキャンプのインフラや鉄道を爆撃しようと、もっと努力しなかったのか、と。ワシントンとロンドンは、ナチスの犯している恐ろしい犯罪のことはちゃんと知っていると、戦争の終わるまで言っていた。その後、アウシュヴィッツやトレブリンカのような民族抹殺センターが解放された——**ソ連の赤軍によって**（これも忘れてはならない）。

<http://news.bbc.co.uk/2/hi/europe/4175045.stm>

しかし、国連ホロコースト・ファイルの最近の公開が示しているのは、ワシントンとロンドンが、ヨーロッパのユダヤ人やスラブ系人が、組織的に死の労働やガス室によって殺される、ナチの“最終的解決”を実によく知っていたことである。そこで問題は再び、なぜ米英両国は、ナチスのインフラを破壊するために、空爆戦略を取らなかったのか、ということになる。

考えられる一つの答えは、西側同盟国はナチスの犠牲者に対して、冷血な無視の態度を取っているというものだった。ワシントンとロンドンの政治体制自身が、反ユダヤ的偏見をもっているとは非難されていた。これは、第二次大戦中に、何千というヨーロッパ・ユダヤ人の亡命者を、これら政府が排斥し、彼らの多くを、ナチ政権下の彼らの死へと追いやったというスキャンダルに見られる通りである。

西洋人の人種的鈍感という、このファクターを除くことなしに、もう一つの、もっと陰悪な

ファクターがある。すなわち、西側の諸政府、あるいは少なくとも、その強力な一部は、ソ連にこのするナチスの戦争努力を、邪魔したくなかったということである。にもかかわらず、ソビエト連邦は、ナチス・ドイツを負かすための西側の、名目上の“同盟国”であった。

この見方は、第二次大戦についての、公的に語られる西側の見方とは対照的な、根本的に異なった考え方があることを示唆する。このもう一つの歴史の物語では、ナチスの第 3 帝国の勃興は、米英の支配者たちによって、共産主義の拡大に対するヨーロッパの防波堤として、意図的に醸成されたものである。アドルフ・ヒトラーの激しい反ユダヤ主義に匹敵するものは、マルクス主義とソ連のスラブ民族に対する、彼の嫌悪のみであった。ナチのイデオロギーでは、彼らはすべて **Untermenschen** (人間以下) であって、“最終的解決”によって根絶すべきものだった。

だから、ナチス・ドイツが、1941 年 6 月から 1944 年下旬にかけて、ソ連を攻撃し、その“最終的解決”を実行していたとき、米英が、彼らの軍隊を本格的に出動させて、西部戦線を開くことに奇妙に気が向かなかったのは、不思議ではなかった。西側同盟諸国は明らかに、ナチスの戦争機械は、それがやるべく本来意図されている仕事、すなわちソ連に代表される、西側資本主義に対する宿敵を滅ぼす使命を、果たしてほしかった。こう言ったからといって、すべての米英の政治指導者が、この暗黙の戦略的ビジョンを、共有していたということではなく、知ってさえいたかどうかかわからない。フランクリン・ルーズベルト大統領や、ウィンストン・チャーチル首相のような指導者は、純粹に、ナチス・ドイツを敗北させることに専念していたように見える。にもかかわらず、彼らの個人的な見解は、強力な西側の企業利益と、ナチス・ドイツの間の組織的癒着という背景に、馴染むものでなければならなかった。

アメリカの作家 David Talbot が『悪魔のチェスボード：アレン・ダレス、CIA、及びアメリカの秘密政府の起こり』（2015）に記録しているように、ウォール街と第 3 帝国の間には、太い金融的なつながりがあり、それは第二次大戦の勃発の数年前にまで遡る。

<https://www.harpercollins.com/9780062276162/the-devils-chessboard>

アレン・ダレスは、ウォール街の法律事務所 **Sullivan and Cromwell** で働き、後にアメリカの中央情報局 (CIA) を率いることになるが、この人物が、アメリカの資本とドイツの産業をつなぐキー・プレイヤーになった。フォード、GM、ITT、それに Du Pont のようなアメリカ産業界の大物は、IG フェルベン (ホロコーストに使われた毒ガス、Zyklon B の製造者)、クルップ製鋼、ダイムラーのようなドイツの産業の大物たちに、巨額の投資をしていた。米英の資本はこのようにして、ナチスの戦争機械と、最終的解決から生ずる奴隷労働からの利益への依存に、深く巻き込まれていた。

これは、なぜ西側同盟国が、強力な空爆の能力を間違いなくもっていながら、ナチのインフラを破壊しようとしなかったかを、説明するだろう。ナチスの犠牲者に対する人種的偏見による、単なる無気力や無関心よりもっとひどいのは、アメリカとイギリスの資本家エリートが、第3帝国に投資していたことである。その目的は主として、ソ連や、あらゆる種類の社会主義的なグローバルな動きを、消滅させることであった。ナチスのインフラを爆撃するのは、西側の資産を抹消することに等しかったであろう。

この目的のために、戦争が終わりに近づき、ソ連が単独で第3帝国を片付けるような様子を見せたとき、米英両国は遅まきながら、ヨーロッパの西と南から、戦争努力の気構えを見せたのだった。その目標は、ナチ政権に残っている西側の資産を、救出することであった。やがて作られることになるアメリカ CIA の長官、アレン・ダレスは、トップのナチ党員と、“サンライズ作戦”として知られる、秘密の放棄取引でヨーロッパから略奪した、彼らの金を救出した。イギリスの軍情報局 MI6 もまた、ナチの資産をあぶないやり方で救出する、アメリカのひそかな努力に参加した。ソビエトの同盟国に示す露骨な不信は、第二次大戦に続いて直ちにやってきた、冷戦の冷ややかさの前触れであった。

何が起ころうとしていたのかについて、意味深い、決定的な証言が、最近の **BBC** の インタビュー で、**Ben Ferencz** という、生き残っている最高齢の、ニュルンベルグ裁判のアメリカの検事によってなされた。98歳のフェレンツは、何十人ものナチ戦犯が、米英の政府権力者によって釈放されたかを、まだ明瞭に思い出すことができた。フェレンツはアメリカの将軍 **George Patton** が、1945年5月初旬、第3帝国の最終的な降伏の直前に、「我々は間違った敵と戦っていた」と言った言葉を引用した。パットンの正直な、ナチス・ドイツよりソビエト連邦への、より深い敵対感情の表現は、いかに米英の支配階級が、ソ連と、欧米を通じて起こりつつあった社会主義運動に対する、地政学的戦略戦争において、ヒトラーの第3帝国と癒着していたかを傍証する。

言い換えると、米英が1945年後に始めた冷戦は、すでに進行していたモスクワに対する敵対政策の継続にすぎず、それは、ナチス・ドイツの形成という形で1939年に起こった第二次大戦より前に、始まっていた。さまざまな理由で、西側強国にとって、ソビエト連邦とともにナチの戦争機械を亡き者にするのが、好都合だった。しかしご覧のように、ナチ機械の中に存在した西側の資産は、米英のソ連に対する冷戦態勢の中へと、リサイクルされた。米英の軍事情報局が、ナチスの犯罪によって、基礎を固められ、財政を保証されたのは、実に呪わしい遺産であった。

最近の、国連のホロコースト・ファイルの一般公開は——米英の長年にわたる言い逃れにもかかわらず——これら西側強国が、ナチ第3帝国の人類史的犯罪と、深い共犯関係にあつ

たという歴史分析に、さらに証拠を加えるものである。彼らがこれらの犯罪をよく知っていたのは、それを助けていたからである。そしてこの共犯は、西側がロシアを邪魔な地政学的ライバルとして敵視していたことから生じた。

これは単なる歴史を学ぶ人の学術問題ではない。西側がナチス・ドイツと共犯関係にあったことから、現在進行中の、ワシントン、イギリス、および NATO 同盟国の、モスクワに向けられた敵意が導き出される。ロシア国境に沿って無慈悲に増強されている NATO 軍、西側のプロパガンダ・ニュースメディアの、とめどもないロシア憎悪、薄弱な根拠による制裁という形の経済的断絶、こうしたことすべてが深く歴史に根づいている。

西側のモスクワに対する冷戦は、第二次大戦の前から存在し、ナチス・ドイツの敗北の後も存続し、ソビエト連邦がもはや存在しないという事実にもかかわらず、今日まで存続している。なぜか？ その理由は、ロシアが、アングロ-アメリカン資本主義の覇権にとって、邪魔なライバルだからであり、これは中国でも、他の台頭する強国でも、狙った一極覇権主義を覆そうとする者はみな同じである。米英のナチス・ドイツとの癒着は、今日、NATO の、ウクライナ・ネオナチ政権や、ジハードイスト・テロ集団との癒着という形になって現れている。後者は、シリアなど、ロシアの利益に対する代理戦争として送り出されている。プレーヤーは時代と共に変わるかもしれない。しかしその根源の病理は、米英資本主義と、その覇権主義への耽溺にある。

決して終わらない冷戦が終わるのは、アングロ-アメリカン資本主義が、ついに敗退し、純粹により民主主義的なシステムに、取って代わるときだけである。——以上